

---

# CRIM EATERS

ライトネーム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CRIM EATERS

### 【ゾード】

N7624L

### 【作者名】

ライトナーム

### 【あらすじ】

とにかく読みな。

そこに記された悪魔達の戦闘の足跡だ。

但し、覚悟しな。

読んじまつたら後戻りはできないぞ。

## BATTLE REPORT

電腦暦・・・現実と電腦が融合してから、はや、4世紀が過ぎ去つた現代。

人々は、その仮想空間と化したリアルを恩恵として享受していた。しかし、世界は、一刻一刻と腐敗し崩壊を始めていた・・・。

昼夜を問わず発生する凶悪犯罪・・・手段を選ばぬテロリズム・・・悪化の一途を辿るサイバー犯罪・・・。

止められぬ犯罪やテロに危機感を覚えた連合国家は、ある組織を創設した。

特殊機動部隊 通称 特機隊オメガ

彼らは、最新鋭の殺戮兵器群を用いて犯罪やテロの撲滅を目的とした部隊であり、自己判断での殺害権が与えられていた。

そして、この記録は、特機隊でも対処できない相手に対して対抗するため極秘で設立された特殊任務部隊 特務隊『B・S・T・A・R・T』の戦いの記録である。

### First mission

出撃とは敵に恐怖を与えるため

夜の繁華街・・・ネオン輝き欲望が入り混じつた花を咲き誇らせる所であり、昼間とは違う顔を見せている。

しかし、その夜の街に突如、爆発音が響き渡つた！――！

炸裂する銃撃音と悲鳴に街は、恐怖へと彩られていく中、その災禍を引き起こした集団がいた。重厚な装甲服に身を包み、それぞれの手に銃を持ち市民にまで攻撃を加えていく彼らから見てもテロリストであろう。

駆けつけた警察や特機隊も市民を保護しながら戦うために防戦一方である。

『…こちら第4小隊！テロリストが市民を盾に！手が出せません！』

1

『第2小隊！市民を人質に取られており応戦不能！！指示を請う！』

第三回 亂世の名将三才ノリニシの異聞を受けて  
負傷しています！メディックを寄こして・・・うわ  
――――――

次々と無線から特機隊の不利を知らせる通信が入つてくる。

!

「もしや、テロリスト共は、これを狙つて行動を起こした可能性が

卷之三

その時だつた。

「特務隊に出撃命令をだせ。」

今まで沈黙を守っていた参謀副司令官 ロード・ストラスが重々しい声で告げた。その瞬間、指令室が水を打つたかのように静まり返った。

ための彼ら

ロードは、一喝をオペレーターにくれてやるとスッと口元に笑みを浮かべて、

「それに彼らなら」の事態を收拾できる・・・全ての責任は、私が負いつ。

出撃命令をハンドディシ<sup>ヨ</sup>ンレッジで発令せよ。」

「ついして特務隊に出撃命令が下された……。

## ヴァンダス第3区 メインストリート

「ヒヤハハハハ！！そらそら、さつさと来いよ！」

テロリストが短機関銃を連射し、装甲車の陰に隠れた隊員に弾丸をくれてやる。

すると、出て来ない事に腹を立てたのかテロリストは、ストリートの方に逃げていく市民の方へと銃口を向けた。

「な！ や、やめろーーー！」

装甲服に身を包んだ隊員が叫んだ。

しかし、テロリストは、ニヤリと笑つてからゆつくりと引き金を引いた。

軽快な発砲音と同時に弾丸が秒速25発のスピードで吐き出され、市民へと向かつていく。

誰もが絶望的な惨状を想像して目を閉じ、悲鳴を待つた。

しかし、いつまで経つても何の変化も訪れない。

そして、現場は、急に静寂に支配された。

「だ、誰だ、テメエはーー！」

急に先程のテロリストの男がうろたえ始めた。

その声に全員が目を開くと、そこには、驚くべき光景が展開されていた。

『こちら特務隊《B・S・T・A・R・T》。お前達の行為は、市民の生命や街の運用を破壊する。ただちに戦闘行為を中止し、武装解除せよ。』

凜とした声が響き、そこには腕部から発生させた透明なシールドで弾丸を受け止めている蒼の装甲服にツインアイの外部視認カメラを持つた人物が立っていた。

「はー、これでも喰らいやがれーー！」

今度は、別のテロリストが大型の自動拳銃のようなレーザーガンを

撃つた！

銃口付近に小さく火花が散つた瞬間、閃光が放たれた！

「無駄だ・・・。」

ただ、その一言が紡がれるのと同時に装甲に着弾したレーザーは、あっけなく

粒子となって弾けてしまった。

「な、何だと！？」

これには、テロリストだけでなく特機隊員も驚いた！

現代の高度な科学技術をもつてしてもレーザーなどの光学兵器を防ぐ金属またはシステムは、完成されたと言う事例は報告されてはない。

だが、今日の前でそれが起こったのだ。

『今の攻撃により投降の意思なしと判断。連合国家法 第351条により

殺人権をもつてお前達を殲滅する。』

そう彼が宣言した瞬間、ツインアイが鋭く光り、テロリストの姿を捉えた。

その姿にテロリストらは、本能的な恐怖を感じ、背に冷たいものが流れた。

「ナイト、目標殲滅を開始する。」

その一言と同時にナイト（ここでのコードネーム）の右手に大型の自動拳銃が握られ、ためらいもなく引き金が引かれた。

「があ・・・！・・・！」

テロリストの一人が短い悲鳴をあげて倒れる

その後は、ナイトによる一方的な攻撃が機械的に続いていく。

ある者は、頭を撃ち抜かれある者は、鉛の牙によってミンチ挽肉と化していた。

全く躊躇いのないその行為には、特機隊の面々も目を背けるほどであつた。

「・・・生体反応〇を確認。」

ナイトは、文字通り機械的に淡々と咳きながら打ち切った弾倉を引き抜き、銃に新しい弾倉を込めていく。

「ナイト、今回のターゲットを確認しました。前方のトレーラー内です。」

ナイトのモニターに兎人の女性がバストアップ[画像が表示された]「了解した。」

「気を付けてね、兄さん。」

心配そうに言う女性に対し、

「メサイア、作戦中だぞ。その呼び方は控えてくれ。」

「あ！」、「じめ、申し訳ありません。」

女性（ここではメサイア呼ぼう）は、謝つてきた。

「だけど、ありがとう。じゃあ、終わらせてくるから、オペレートしっかりお願ひ。」

ナイトは、先程のテロリストに見せたものより、優しい声でメサイアに言つた。

しかし、その顔は、すぐに兄の顔からナイトに戻つていた。

『前方のトレーラーに高エネルギー反応を確認！今回のメインター<sup>ゲット</sup>です。』

メサイアの声と同時にナイトのメインディスプレイにも警告の文字が表示される。

「さつそく出てくるか。」

ナイトが、呟くと同時にトレーラーの後方に積載されたコンテナが派手に内側から吹き飛んで、ソレが姿を現した。

ナイトを遙かに上回る機械の巨人 P S T だった。

P S T とは、有人人型機動装甲兵器の事で、戦闘兵器から作業用まで広く普及している。つまりは、搭乗しているパイロットの動きをダイレクトに実行するパワード・スーツである。

『貴様あ！よくも我々の同胞に手を掛けたな！』  
外部マイクを通してパイロットの怒声が響き渡る。

「警告はした。それ以上、お前達、テロリストに慈悲をかけるつも

りはない。』

ナイトは、静かに告げた。

『ならば、貴様が死ねええええ……！』

P.S.Tの鋼の拳が、ナイトの体にめり込み、盛大に吹き飛ばす。次の瞬間、反対側にあつた特機隊の装甲車の装甲にめり込んで止まつた。

『ガハハハ！…どうだ、この威力は！…これならば、貴様とて無事では済むまい！』

パイロットは、笑い声をあげながらナイトに近づいていく。

『近づけるな！応戦しろ！…』

特機隊員は、ナイトを守るために銃撃を開始する。

だが、さすがは戦闘兵器である、その剛腕が訓練された特機隊員達を薙ぎ倒していく。

『くつそおおおお！…！…』

足を負傷しながらもマシンガンを両手に構えたまま打ち続けている隊員に対して、P.S.Aは無慈悲に拳を振りおろした。

スローモーションのように自分に迫つてくる拳…遠くで自分の名前を叫ぶ同僚や隊長…そして、繰り返される自分の歴史。

（ああ、これが、走馬灯か）

隊員は、素直にそう思つた。自分は、後数秒後に肉片に変わつてゐるだろう。

しかし、いつまで経つても痛みは、訪れなかつた。

恐る恐る目を開けてみると、そこには、衝撃的な光景があつた。

アイツが拳を止めていた。噂に聞いていた『B・S・T・A・R・

T』の戦闘用アンドロイドが、片手で止めていた。

しかし、先程とは、大きく異なつてゐる点があつた。まるで鎧のように重厚な装甲を纏つていていたのだ。

『な、何故、貴様動ける！…！…！…？…？…』

パイロットは、モニターの映像が故障ではないかと疑つた。

『…・…・…・…』

ナイトは、黙したまま右の拳を握りしめた。

『ストレングス』

そんな電子音声とともに押されていない右手に紅い光が走り、拳を深紅に染めた。

それを確認するとそのまま、ナイトは拳を握り、深紅の拳をPSTの拳に叩きつけた。

次の瞬間、PSTの腕は、粉々になつて弾け飛んだ。

『・・・・は？』

パイロットは、何が起きたか理解出来なかつた。

何が起きた？ 奴は何をした？ 一体、何が起きている？

混乱した頭でパイロットは、必死でPSTを操作しようとした。

情けなどこらない・・・。

ナイトは、誰にも聞こえないうに小さく囁くように呟いた。そして、右手を前に突き出した。と、何も無かつた空間から剣のような物が出現し、躊躇いもなく掴まれた。

「君達の戦闘行為及び本官に対する警告無視並びに攻撃行動は、既に連合国家法において殺人権が許可された。よつて、死刑を執行する。」

その宣言と同時にナイトは、剣を手に走つた。

『ぐ、来るなああああああ！－！』

パイロットは、恐怖した。だが、それが、彼の最後に見た光景になつた。

幾つかの閃光が走り、PSAは、只の金属片へと変わつていた。

その直後、真っ赤な血のようなオイルがナイトへと降り注いだ。

蒼色の装甲は、瞬く間に深紅に染まつていくそれは正に・・・・・。返り血を浴びた剣士のようだつた。

『 いちらナイト。ターゲットの殲滅完了・・・帰還する。』  
そう告げた瞬間、光の粒子を散らしてナイトの姿は、その場から消えてしまった。

まるで、存在などしていなかつたかのようだ・・・。

#### 連合国家防衛組織本部 参謀指令室

『 す、すごい。只今のナイトの作戦所要時間5分ジャスト。アーマーの損傷率0% 残存敵勢力反応ネガティブ パーフェクトです。』  
オペレーターが、夢でも見ているかのように報告する。

「ふふ。さすがだな、。彼・・・いや彼らこそが、この国の楯であり剣になる存在だ。」

ロードの静かな笑い声が指令室に響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7624/>

---

CRIMEATERS

2010年10月8日22時14分発行